

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

生活 第13号

— 小学校，特別支援学校対象 —

平成24年4月発行

気付きの質を高める「振り返り表現する活動」と「伝え合い交流する活動」の在り方
— 「ふりかえりカード」の活用を通して—

平成20年3月の中央教育審議会答申の「気付きを質的に高める指導が十分行われていない」との指摘を踏まえ、学習指導要領解説生活科編の第5章第4節「学習指導の進め方」では、気付きの質を高めるために「振り返り表現する機会の設定」と「伝え合い交流する場の工夫」などが求められている。

そこで本稿では、それらの指導上の留意点等について、具体的な実践を例に述べる。

1 気付きの質を高めるために

低学年の発達段階を考慮すると、子どもが自ら気付きを自覚することは難しい。そのため、教師は、子どもの様子やつぶやきなどから、その気付きを見取り、適切に働き掛けることが大切になる。その際、教師自身が、「気付き」とは何か、また、その「質が高まる」とはどういうことかを具体的にイメージできなければ、それらを見取り、どう働きかければよいかを考えることはできない。そのため、教師は、事前にそれらを具体的に捉えておく必要がある。(気付きとは何か、また、その気付きが高まるとは、どういうことかに

については、指導資料「生活」第9号及び第10号参照。)

2 「振り返り表現する活動」と「伝え合い交流する活動」の指導に当たって

(1) 振り返り表現する活動

生活科では振り返りの活動として、これまでも言葉等による表現活動が行われてきた。活動や体験したことを言葉などによって振り返り表現することで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になったり、それぞれの気付きを共有し関連付けたりすることが可能になるからである。

こうしたことを背景にして、これまで「単元の最後は、表現活動でまとめる」というのが一般的な展開となっていた。しかし、「表現のためのまとめ学習」に陥りやすく、「何のために表現させるのか」が考慮されない実践も見られるようになった。表現することを通して、気付きや思考の深まりがなければ意味はないのであり、気付きを基にした表現活動にすることが求められる。

(2) 伝え合い交流する活動

子どもは、体験したことや調べたことを伝え合う中で、「友達が調べている魚屋さんも、早起きして頑張っているんだな。」など、自分が発見したと友達が発見したことを比べ、似ているところや違うところを見付ける。そして、「私が調べているパン屋さんは、他にどんなことを頑張っ

ているのかな。」などと、次々に調べたいことを明らかにして、再び地域に出かけていく。このように、互いに伝え合い交流する活動は、集団としての学習を高めるだけでなく、一人一人の気づきを質的に高めていく上でも有効である。生活科の学習では、一人一人の気づきを全員で共有し、みんなを高めていくことが重要である。

3 実践例

1	単元名 「みんないっしょに」(第1学年)		
2	単元の目標		
	(1) 一日の生活を振り返り、家の人と一緒に仕事や趣味の活動をする中で、一緒に活動したり、自分の役割が増えたりすることの喜びを感じるとともに、家の人のことや自分のできることなどが分かる。		
	(2) 自分の役割を積極的に果たし、規則正しく健康に気を付けて生活することができる。		
3	本時(6/12時)		
	(1) 目標 家の人と一緒にしたことを発表し、家の人と一緒に活動することの楽しさに気付くことができる。		
	(2) 実際 [] 子どもの意識 ○指導・手立て ※評価		
過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け・評価
出 あ う	1 これまでの活動の内容を振り返り、本時の学習のめあてを確認する。 いへのひとといっしょにしたことをはっぴょうしよう。	(分) 5	○ これまでの活動を、写真やワークシートを見ながら振り返る。 ○ 子どもから出た言葉の中でよりよいものがあつたらそれも取り入れながら、めあてを立てる。
伝 え る ・ 深 め る	2 ふりかえりカードから気持ちを表す言葉を取り出し、きもちカードに記入する。 3 発表の仕方を確認する。 (1) 一緒にしたことを発表しよう。 (2) ふりかえりカードを仲間分けしよう。 (3) きもちカードを貼ろう。 4 ふりかえりカードにかいたことを発表する。 (1) 一人ずつふりかえりカードを読む。 〔みんなで夕ご飯を食べました。学校の話をしました。楽しくて、おいしかったです。〕 (2) ふりかえりカードを分類する。 〔「みんなで楽しむために」なので、これは「しゅみ・あそび」です。〕 (3) きもちカードをふりかえりカードに貼る。	25	○ 「きもちの木」を見ながら、気持ちを表す言葉について確認する。 ○ 「きもちの木」を参考にして、自分の気持ちを表すカードの色を選び、記入させる。 ○ 子どもの立ち位置や動き、発表の仕方が分かるように実際に教師がやって見せる。 ○ 分類の仕方を確認する。 ○ 1グループごとに並んで発表させる。 ○ それぞれが活動していたときの服装や使った持ち物を用意させる。 ○ 分類の仕方に意見があるときには、挙手して発言させる。 ※ 家の人と一緒にしたことやその感想を発表することができる。
広 げ る	5 ふりかえりカードを見て、思ったことを話し合う。 〔・ 僕もやってみたいな。 ・ あれは、私一人でやったことある。〕 6 きもちカードを見て、気付いたことを話し合う。 〔・ 仕事も遊びもどちらも「たのしい」が多いね。〕	12	○ 同じ経験や類似した経験をしたことがある子がいないか確認する。 ○ 各家庭の生活習慣・環境の違いを十分考慮する。 ○ マイナス面の気持ちについても、互いに認められるようにする。 ※ 家の人と一緒にすることの楽しさに気付いている。
返 振 る	7 本時の学習を振り返り、次時の学習を確かめる。	3	○ 「仕事」の方に目を向け、自分のできることにについて考えることを確認する。

【鹿児島市立草牟田小学校 岩下理佐教諭の実践から】

気づきを自覚させ、質的に高めるためには、子どもの気づきを見逃さない教師の鋭い観察眼や適切な言葉掛けなどの支援が大事であることは述べるまでもない。しかし、本単元の

指導内容の一つである(2)「家庭と生活」は、他の内容とは異なり、家庭での取組が中心となるため、子どもの活動の様子を教師が逐次見取った上で、言葉掛けによる気づきの自覚

化を図り、質的に高めることは難しい。そのため、例えば、「ふりかえりカード」を活用するなどして、子どもに楽しかったこと、感じたことなどの家庭での活動を振り返らせ、家族との関わりを考えさせることが大切である。

そこで、ここでは、「ふりかえりカード」を活用した実践例に基づいて述べる。

(1) 振り返り表現する活動

前々時までには、子どもたちは、家の人と一緒に家の仕事や家の人々の趣味の活動を行っている。本時は、その時の様子や気持ちなどを発表する時間である。

ア 「ふりかえりカード」の活用

前時では、家庭での様子を「ふりかえりカード」に表す活動を行った。この活動は、語彙が十分ではない1年生の伝達能力を高め、その発表において聞き手の理解を容易にするという長所があるが、それ以上に、カードに表すために子ども自らが家の人について振り返ることに意義がある。絵に表すには、家の人々の表情や動作を思い起こす必要がある。家の人との楽しかった活動を紹介したり、自慢したりしたいという思いから、子どもはその時の様子を思い出して表そうとする。つまり、家の人と共に過ごすよさに着目した気付きへと、気付きの質を高めることができる。本実践においても、子どもは、「おかあさんとどんぐりひろいをしました。たのしくて、たのしくてたまりませんでした。」などと、楽しかった思い出や家の人々の好きなことを振り返りながら表していた。

イ 活動や体験の充実

このような、言語活動を充実させるための第一歩は、子どもの活動や体験を充実させることである。子どもの気付きを引き出すためにかかせることばかり考えがちであるが、子どもの対象への気付きは十分高まっていないことが多く、かく活動も先に進まない。子どもの中に表現する内容、表現したいという思いがなければ、活動の充実はない。活動や体験を充実するという前提があって初めて「ふりかえりカード」の活用が意味をもち、気付きの質を高めることになることに留意したい。

(2) 伝え合い交流する活動

発表する場では、電子黒板に映し出された「ふりかえりカード」を基に、「かぞくでおんせんにいきました。たのしかったです。」など、家の人との関わりを想起しながらうれしそうに発表した。聞く側の子どもは、友達の発表を聞いて、「ぼくもいえのひとといったことあるよ。」などと、自分と家の人との関わりを思い出して発言したり、その思いに共感したりする姿が見られた。こうした交流活動を行うことで、改めて家の人々のよさに気付くことができた。

ア 振り返る内容の重視

こうした言語活動では、低学年ならではの感覚的な言葉は大切にされなければならない。「楽しかったです。」などの短い言葉の中に多くの気付きが含まれている。「楽しかったです。」と感ずることは大切なことであるが、更に大切なのは、「何が」「どのように」楽しかったのかという内容である。

例えば、「お父さんと一緒にゲームをしたことが楽しかった。」と振り返った子どもは、これまで無自覚であった家の人と共に過ごすことの楽しさやよさに気づき、自覚する。そして、そんな家の人のために家族の一員として自分にできる仕事をしようと意欲付けられる。教師は子どもに寄り添い、それらを引き出し、つなぎ合わせ、集団と個の学びを形成していく必要がある。これまでの生活科の授業ではこの部分が軽視され、形式的な振り返りに陥りやすかったと言える。

また、「楽しかったです。」という言葉で「～さんは、～だったから、楽しかったんだと思います。」などと、みんなで一緒に探ることも大切である。それは双方向的なものであり、自分と他者との伝え合いの相違が際立てば、心沸き立つ学びになる。

イ 聞く側の子どもの態度の育成

伝え合う場面では、発表する側の子どもに着目しがちであるが、聞く側の子どもの表情やしぐさといった、言葉によらない表出もコミュニケーションの大切な要素である。

例えば、発表する子どもは、笑顔でうなずきながらじっくりと話を聞いてくれる友達の態度を「分かってくれた」と受け止め、「うれしい」と感じる。それは、自分が受け入れられたことへの喜びであり、「もっと伝えたい」という意欲にもつながっていく。“聞く姿勢が言わせる”のである。

また、聞く側の子どもも、笑顔で生き生きと話す相手の姿に引き込まれていく。言語活動はこうした非言語的な部分も含めて考えることが大切である。

こうして、自分の伝えたいことが相手に伝わる楽しさや、相手が伝えたいことを理解できる楽しさ、そして、こうしたやり取りを繰り返す中で、心のつながりが豊かになる楽しさを実感することが、互いのことをよりよく理解しようと努力し合い、身の回りの人々と進んで交流しようとする態度を育むことにつながる。

「振り返り表現する活動」や「伝え合い交流する活動」の導入は、生活科が重視する「具体的な活動や体験」をその場限りのもので終わらせることなく、まずもって、言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して体験したことを他者と情報交流することを目指している。

しかし、振り返る場や発表する場を設定しさえすれば、自動的に子どもの気づきの質が高まったり、結果として言語力や思考力、表現力が高まったりするわけではない。十分な活動や体験、そして、気づきのない中で、いくら「話し合ってください」と投げ掛けても、子どもは活動できない。まず、子どもたちが「表現したい」、「伝えたい」という思いや願いを心に抱くよう、活動や体験を充実させることが重要である。

「具体的な活動や体験を通して」は、生活科の目標の冒頭に位置付けられた、生活科の学びの大前提であることを改めて確認したい。

—参考文献—

- 〇 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活科編」平成20年8月、日本文教出版
- 〇 原田信之編著「気づきの質を高める生活科指導法」2011年3月、東洋館出版社

(企画課)